

学び合い、高め合い、励まし合い、認め合う教育の追求

全国協同学習研究会会報 2006年度 2号

発行日：2006年9月10日

事務局

最終ページに第38回全国協同学習研究大会の一次案内があります

協同学習は有効である

杉江修治（中京大学）

協同学習は果たして本当に効果があるのか、根拠を伴った解説が欲しいという素朴な問い合わせに、最近になってもしばしば出会う。三十数年前、私自身の修士論文の前書きに「すでに学習における協同の有効性は明らかであり、今後はその有効性をより高める工夫がテーマとなる」といった趣旨の文言を引用したように、協同学習の研究の世界では、いまさら何をというほどに、協同の有効性は常識であるにもかかわらずである。

ただ、いまだに日本の教育界には、協同学習の有効性への確信は定着していない。研究者の怠惰も指摘されようが、日本の教育文化の底にある、競争信仰を含む強い固定観念を動かすことの難しさも感じるのである。今回のような機会に、繰り返し、確かな情報を発信し続けなくてはいけないのだろう。

協同学習は二つの側面で個別学習、競争学習と比較して有効である。その一つは、学習内容の習得の側面である。協同によって、いわゆる勉強の成績が上がることを示す実証的な研究の数は、それとは逆の結果を示す研究の数はるかにしのぐ。成績の底上げはほぼ確実に得られ、また成績上位者の学習内容の定着もよいという結果がしばしば見られる。

もう一つは、同じ学習時間の中で豊かな同時学習が行われるという点である。協同事態のもとで、学習者中心で学習を進めることを通して育つ自主的な学習態度、互いに高め合う活動の中で育つ個人としての責任感、話し合いを通してコミュニケーション能力が育ち、相手に対する感受性を高めていくこともできる。実証研究では、成績以外のさまざまな側面での効果も多くの研究で認められている。

協同学習の研究者は、基本的には教育心理学を中心とした実証研究に携わる者たちであ

る。したがって、その議論は、必ず実証的な知見に基づいたものであり、信念を披瀝しているわけではない。国内では、協同学習について、実験的な研究だけではなく、実践の場を舞台にした実証研究もすでに古くから行われてきている。広島大学の末吉悌次氏の『集団学習の研究』（1959年）、名古屋大学の塩田芳久氏の『バズ学習方式』（1962年）などにそれを見ることができる。

また、アメリカ合衆国を中心とした海外での協同学習への研究的、実践的関心の高まりは大きい。ミネソタ大学のジョンソン兄弟が過去の実証的研究 122 編をメタ分析という手法で検討し、さまざまな場面で、さまざまな年齢対象で、競争学習、個人学習と比べて協同学習が一貫して優れているという報告をしている（Johnson & Johnson 1989）。外国の数多くの研究を正しく理解したい場合は、A.コーンの著した『競争社会をこえて』（法政大学出版局）が翻訳されており、これをご覧いただくと分かりやすい。

協同が優れるのは、学習者同士の働きかけ合いがあることに加えて、仲間同士で高まり合おうという、相互の信頼関係が生み出す学習への動機づけの高まりがその大きな理由だと考えられている。

敗戦後の一時期、アメリカの教育使節団の提言によって、生活カリキュラムを軸とした実践が行われ、分団学習という小集団を用いた学習形態が全国に広まった時期があった。この実践は基礎学力の低下が明らかとなり、系統学習へと移行していったのであるが、その原因は小集団の活用それ自体にあるのではなかった。小集団の効果的な活用に関する実証的な知見が無く、教師の経験だけで進められたところに最大の原因がある。

協同学習は効果があるのですかという質問の背景には、今に至ってなお、分団学習レベルの協同学習理解しか実践の場に無いのではないかという実態をうかがわせるものがありそうである。協同学習の進め方、またそこでよく用いられる小集団の活用方法については多くの参考書が出ており、学ぶ手がかりに事欠くことはないはずなのである。最近日本協同教育学会で出された『先生のためのアイディアブックス協同学習の基本原則とテクニック』（ナカニシヤ出版）なども役立つ参考書の一つである。

自ら学ぶ力を、本当に子どもたちに身につけさせるために、学び合い、高め合い、認め合い、励まし合う授業へと、日本の実践を大きく転換させることが必要である。協同学習の研究の意義と実践のよさを知る者の継続的な活動が確かに必要とされているのである。

文献

- コーン（山本啓・真水康樹訳） 1994 競争社会をこえて—ノー・コンテストの時代. 法政大学出版局
ジェイコブス・パワー・イン（伏野久美子・木村春美訳 関田一彦監） 2005 先生のためのアイディアブックス協同学習の基本原則とテクニック ナカニシヤ出版
Johnson,D.W., & Johnson,R.T. 1989 *Cooperation and competition: Theory and Research*. Interaction Book Co.

指導者が構造化する協同と学習者が創りだす協同

伊藤 篤（神戸大学総合人間科学研究科）

学校等で子ども・青年が協同的に学ぶとき、そこには明確な目標が存在し、それを獲得するために協同という方法が導入される場合が多いと思います。また、そのような目標に到達する以外に、協同という行為を通して子ども・青年は多様な技能や態度も身につけます。いずれにしても、学校等では、指導者が意図的に協同的な学びの過程を構造化することが多いように思われます。他方、明確な目標は存在しませんが、活動の過程において学習者みずからが協同的な状況をつくりだして、そこから何かを学んでいくという状況もあります。このような形態の協同は、生涯学習の文脈で大人が学ぶ場合やボランティア活動のなかで大学生が学ぶ場合に見られるのではないのでしょうか。このコラムでは、この「学習者がつくりだす協同」を、筆者がボランティア学生を対象におこなった研究をとおして紹介します。

学生に与えられた役割は、子育て支援事業のひとつとして、児童館のスペースを毎週1回借りて筆者が運営しているドロップイン・センター（好きなときに来て好きなときに帰ることのできる親子のくつろぎ空間で、自由に子どもを遊ばせ、親どうしが仲間づくりや情報交換をし、必要に応じて育児に関する相談をおこなう1次予防の場）において、「子どもの安全に配慮する・親子がうまく遊べていないときはそのきっかけをつくる・初めて来た親子、交流や遊びの輪に入れない親子に積極的に働きかける」でした。学生は、毎回、活動後に記録シート（A4班1枚）に「その日にかかわった親の様子・子どもの様子・自分が感じたこと」を記入し、ブリーフィング（短時間の検討会）に参加しました。このうち、最短でも4か月で10回以上参加した6名の学生の記録を、前半と後半に分割して分類しました。分類基準の生成や分析手順は省略します（詳しくは、「日本福祉教育・ボランティア学習学会第11回こうべ大会 発表要旨・論文集 p42~45」を参照ください）。

その結果、次のようなことが明らかになりました。個人的にさまざまな特徴があるものの、全体的に共通していたのは「対象者（母親や子ども）を客観的・分析的・批判的に観察している段階」から「対象者への共感と対象者からの情報収集にもとづき、自分なりの課題を設定してそれを試み、その結果を自己評価する段階」への変化でした。前半と後半の大きな違いは、観察中心と働きかけ中心の違いです。もちろん、観察しているだけでも課題意識が生じて何らかの試みや評価が起きる可能性はあるのですが、実際のデータは「観察と課題意識・試み・評価とは共存せず、情報収集・共感と課題意識・試み・評価とが共存していた」ことを示しています。つまり、積極的な働きかけの鍵をにぎっているのは「共感」「情報収集」だと思われれます。

学生たちの記録を読みますと、対象者を観察の対象から共感の対象へと捉えなおしたときから、対象者に自分から話しかけ、対象者の日常生活や悩みなどの個人的な情報を聞き

出せるようになっており、その延長線上に働きかけが見られます。つまり、ジョンソンらの指摘する協同学習における諸要素のうちの「対面的—積極的相互作用」を対象者とともに自然に創りだしていたのです。また、毎回のブリーフィングで話し合った内容が課題意識の広がりや試みの修正につながっていきました。これは、ジョンソンらの「改善手続き」に相当します。このブリーフィングは、当初は設定されたものであり形式的な内容でしたが、回数を重ねるごとに「改善に向かう内容」に変化していったことから判断すれば、この要素も意図されたというより自然に創られたと言えましょう。このように、学習者がそれと気づかないまま、主体的に協同的な構造を創っている場合もあると思われます。この点を今後どのように明らかにしていくのかも、私たちにとって興味深いテーマになるのではないのでしょうか。

* **編集部からの情報**：上に紹介されているジョンソンによる協同学習入門の本は、伊藤篤さんも共訳者となっている『学習の輪』（二弊社 刊）があります。手ごろな協同学習入門書としてぜひご覧ください。

日本協同教育学会第3回大会報告

8月5、6日に、石田裕久大会委員長のもと、南山大学で、「『協同』で学ぶ、『協同』を学ぶ」をテーマに日本協同教育学会第3回大会が開催されました。

初日は総会開催後、13時から1時間半、東京大学の佐藤学氏の講演「協同的な学びによる学校改革—学びの共同体のヴィジョンと哲学」がなされました。150人ほどの参加者は、講演終了後の質疑にも積極的に参加し、有意義な時間となりました。

佐藤氏の講演では、協同の考え方を一貫させた学びの共同体への展開を具体的にイメージさせてくれるものであり、これまでの協同教育が展開してきたパラダイムを再度確認させてくれるものでした。

その後、約1時間にわたり「フォーラム」という形で以下の3つの提案と交流がなされました。それぞれ、大学における授業改善が主なテーマとなったものです。

- ① 協同学習をめざして 西谷英昭
- ② 協同を基軸とする教育実習プログラムの改革への取り組み—島根大学教育学部におけるFDの実践から 高旗浩志・川路澄人・石上城行・嘉賀収治
- ③ 主体的学習者を育てる授業—キャリア教育の実践を手がかりに 安永悟

さらに、それに続いて2つの分科会に分かれて以下の6つの研究発表が行われました。このブロックでは、様々な研究領域からのアプローチが見られるところなのですが、今

回は小学校から大学までの実践研究が中心となりました。さらに、特別支援教育と協同学習のかかわりについての関心が協同教育学会内で高まりつつあるのですが、それを反映した発表も出るようになって来ました。

- ① 高等学校国語における協同学習による文学作品読解の授業—少人数のグループ討議を中核とした授業スタイルへの転換 水野正朗
- ② 高校現代国語の授業における協同学習の試み—1年1学期・単元『木を植えた男』を課題として 加藤康一
- ③ 英語グループワークへのレディネス—コース・習熟度による差異 伏野久美子
- ④ 軽度発達障害のある子どもの支援と協同学習の可能性 涌井恵
- ⑤ 協同学習とコミュニケーション教育 Gehertz 三隅友子
- ⑥ 夢を持ち、仲間と学び合う中で、自分を拓く子の育成 川井栄治

学びの交流を終えて後 17 時 40 分から大学内の食堂で懇親会が開かれました。佐藤学氏の参加も得、50 名ほどでの楽しい時間を過ごしました。なお、この席で、学会会長の安永氏から、2008 年度をめざして、国際協同教育学会 (IASCE) の大会を日本に招致することが理事会で承認されたということが伝えられました。

大会二日目は以下の4つのワークショップが開かれました。それぞれに特徴があり、多数の参加が見られました。

- ① 協同教育基礎講座 I 長濱文与・関田一彦
- ② ラボラトリーメソッドによる体験学習入門 中村和彦
- ③ 英語授業における協同学習技法の使用 (改訂版) 伏野久美子・木村春美
- ④ 自ら学び力を育てる協同学習の進め方 杉江修治

事務局からのお願い

新しい年度に入りました。会員の方々には会費納入よろしくお願いします。

1 年分 2000 円です。昨年度未納の方は 4000 円の納入をお願いいたします。

郵便振替 □座番号：名古屋前山郵便局 00800-8-166589

□座名称：全国協同学習研究会

事務局からさらにひとつ：e-mail アドレスをお持ちの方へ

この会報並びに様々なご案内を e-mail で送ってもかまわないという会員の方々、空メールで結構ですので事務局宛 (XXXXXXXXXX)、アドレスをお教えてください。経費節減という事務局の勝手なお願いですが、ご協力いただければありがたく存じます。

第38回全国協同学習研究大会・第2回子育て教育フォーラム

一次案内

テーマ：「共に学び 共に育つ」

主催：犬山市立犬山北小学校
 全国協同学習研究会
 子育てフォーラム実行委員会

大会委員長：犬山北小学校PTA会長 大沢 渡
 実行委員長：犬山北小学校校長 加地 健

日程：2007年 2月 16、17日

第1日 第38回全国協同学習研究大会

テーマ：学び合いの授業が目指すものは！（仮題）

平成19年2月16日（金曜日）										
公開授業 1～2限	受付	公開授業 研究3限	公開授業 研究4限	昼食 移動	開会 行事	講演会	分科会 第1～第5	総 評		懇親会
8:50	10:30	10:50	(放課10分)		12:30	13:30	13:45	14:45	16:45	17:00 18:00
犬山北小学校					犬山福祉会館					

講演会講師：犬山市長 石田 芳弘

第2日 第2回子育て教育フォーラム

テーマ：今、子育てに大切なものは！（仮題）

平成19年2月17日（土曜日）			
開会 行事	基調報告	分科会 第1～第4	
9:30	9:45	10:15	12:00
犬山福祉会館			

基調報告：母子生活支援施設課長 色川 美鈴